

ご 挨拶

——第6回子ども学会議のご報告と御礼——

内田伸子 (大会推進委員長／お茶の水女子大学教授)

第6回子ども学会議は「子ども・環境・脳科学」という統一テーマを掲げ2009年9月12日(土)と13日(日)の2日間、お茶の水女子大学を会場に開催させていただきました。

学術集会では、子どもをめぐる様々な問題—子どもの成長・発達に不可欠なものは何か、遺伝と環境、メディアと子ども、早期教育、遊び、子育て支援などをめぐって、発達心理学、脳科学、小児医学、認知科学、メディア教育、子ども文化などの学際的な先端科学の知見をもちより、子どもの養育環境のデザインを探るため活発な学術交流が展開されました。

大会初日は、日本子ども学会会長小林登先生の代表講演「日本子ども学会は『チャイルドケアリング・デザイン』を展開しよう」に続き、お茶の水女子大学名誉教授本田和子先生による基調講演「子どもが忌避される時代」で幕を開けました。

本大会では準備委員会企画シンポジウム3本と公募シンポジウム1本の計4本が計画されていたので、大会初日の午後と2日目午前に、徽音堂と150人収容の大教室の二つの会場に分かれて、二つずつシンポジウムが開催されました。

大会初日の午後は、「今、早期教育を考える」と「子どもとゲームをめぐる過去・現在・未来」が、2日目の午前は、「良質のチャイルドケアリングとは」と「子育てを手助けする『頼りになる情報環境』の構築に向けて」(公募シンポジウム)がそれぞれ2会場で開催されました。どちらのシンポジウムにも出たいという参加者も多く、中には両方に半分ずつ参加したいとい

うことで慌ただしく会場を行き来される皆様もおられました。

大会2日目の午後は、参加者一同が徽音堂に参集し、学術集会をしめくくる鼎談「オオカミ少女はいなかった」が開催されました。新潟大学教授の鈴木光太郎先生の講演を皮切りに、大会事務局長榊原洋一先生、大会準備委員長内田伸子の鼎談が行われ、フロアの皆様の巻き込んで、遺伝と環境の問題について活発な議論が展開されました。この鼎談を通してエビデンスに基づく論証の大切さを共有することができました。

2日間にわたる充実した学術交流を達成した充実感を味わいながら、来年の第7回子ども学会議(2010年10月2日、3日／川越市民会館／大会委員長：渡部茂、明海大学教授、小児歯科学)での再会を約束して、会場を後にされました。

大会参加者、並びに、大会運営にご賛助くださいました皆様に、心から御礼申し上げます。

なお、大会推進委員会委員の小林登先生、一色伸夫先生、宮下孝広先生、安藤寿康先生、沢井佳子先生、木下真様、太田美代様、劉愛萍様、所真里子様の諸氏には大会準備やシンポジウムの企画にご尽力賜りました。また、大会推進委員会事務局長の榊原洋一先生、榊原研究室助手の村松志野様には、大会準備と運営全体にわたり、統括から雑務に至るまで多大なご尽力を賜りました。先生方の素晴らしいお働きぶりのおかげで、無事大会を終えることができましたことを心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

